

# 数値解析と複素関数論 (2) 等間隔標本点 Lagrange 補間

緒方 秀教

電気通信大学 大学院情報理工学研究科 情報・ネットワーク工学専攻

2020 年 12 月 2 日 (水)

# (復習) Lagrange 補間

- $f(x)$  : 未知関数.
- 点  $x_1, \dots, x_N$  (標本点) における値  $f(x_k)$  はわかっている.

$x \neq x_k$  ( $k = 1, \dots, N$ ) における関数値  $f(x)$  を近似計算したい.

## Lagrange 補間

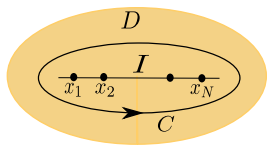
$f_N(x_k) = f(x_k)$  ( $k = 1, \dots, N$ ) なる ( $N - 1$  次) 多項式  $f_N(x)$  による  $f(x)$  の近似.

$$f_N(x) = \sum_{k=1}^N f(x_k) \frac{W(x)}{W'(x_k)(x - x_k)}, \quad W(x) = \prod_{j=1}^N (x - x_j).$$

# (復習) Lagrange 補間

$f(x)$  が解析関数の場合, Lagrange 補間  $f_N(x)$  は複素積分で表される.

- $x_1, \dots, x_N \in$  区間  $I \subset$  領域  $D$ .
- $f(z)$  は  $D$  上の解析関数.



$$\text{Lagrange 補間} \quad f_N(x) = \frac{1}{2\pi i} \oint_C f(z) \frac{W(z) - W(x)}{(z-x)W(z)} dz,$$

$$\text{補間誤差} \quad f(x) - f_N(z) = \frac{W(x)}{2\pi i} \oint_C \frac{f(z)}{(z-x)W(z)} dz,$$

$C$  :  $D$  に含まれ  $I$  を反時計回りに囲む閉積分路.

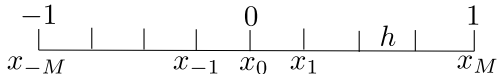
補間誤差の複素積分表示の大きさを評価することにより,  
補間誤差の大きさが理論的に見積もれる.

# 等間隔標本点 Lagrange 補間

- 等間隔に標本点が並んだ Lagrange 補間を考える.
- 補間を考える区間は  $I = [-1, 1]$  にとる.

標本点数  $N = 2M + 1,$

標本点  $x_k = -1 + kh \quad \left( k = -M, -M + 1, \dots, M; h = \frac{1}{M} \right).$

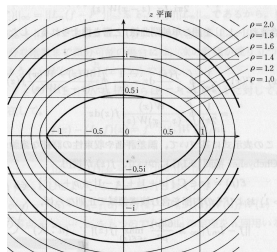


## 定理：補間誤差評価

- $\mathcal{A}(\rho) = \left\{ z \in \mathbb{C} \mid \left| \frac{(z+1)^{z+1}}{(z-1)^{z-1}} \right| = (2\rho)^2 \right\} \quad (\rho > 1).$
- $f(z)$  は  $\mathcal{A}(\rho)$  とその内部で解析関数である。

$$\max_{-1 \leq x \leq 1} |f(x) - f_N(x)| \lesssim \frac{C(\rho)}{\rho^N} \max_{z \in \mathcal{A}(\rho)} |f(z)|,$$

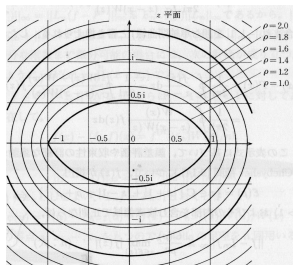
$C(\rho)$  :  $\rho$  のみに依存する正定数。



$\mathcal{A}(\rho)$  の図

- \* 杉原正顯・室田一雄：数値計算法の数理，岩波書店（1994年）より引用。

# 等間隔標本点 Lagrange 補間の理論誤差評価



$f(z)$  が  $\mathcal{A}(\rho)$  ( $\rho > 1$ ) とその内部で解析関数ならば、等間隔標本点 Lagrange 補間について、

$$\begin{aligned} \text{誤差} &= O(\rho^{-N}), \\ &\text{指数関数的収束.} \end{aligned}$$

$\mathcal{A}(\rho)$  の図.

\* 図は、杉原正顯・室田一雄：数値計算法の数理，岩波書店（1994 年）より。

- （定理の条件のもとで）Lagrange 補間は指数関数的収束する。
- 収束のスピードは、関数がどこで解析的であるかに依る。

# 補間誤差評価の証明

補間誤差の複素積分表示を用いる（積分路は  $\mathcal{A}(\rho)$  にとれる）。

$$f(x) - f_N(x) = \frac{W(x)}{2\pi i} \oint_{\mathcal{A}(\rho)} \frac{f(z)}{(z-x)W(x)} dz \quad (-1 \leq x \leq 1),$$

$$W(x) = \prod_{j=-M}^M (x - jh), \quad h = \frac{1}{M}.$$

右辺の複素積分の大きさを評価すればよい。  
積分の大きさの評価は次を用いるのが定石：

$$\left| \int_C g(z) dz \right| \leq \int_C |g(z)| |dz|.$$

# 補間誤差評価の証明

$$\begin{aligned} |f(x) - f_N(x)| &\leq \frac{|W(x)|}{2\pi} \oint_{\mathcal{A}(\rho)} \frac{|f(z)|}{|z-x||W(z)|} |dz| \\ &\leq \frac{(\mathcal{A}(\rho) \text{ の周長})}{2\pi \min_{z,x} |z-x|} \max_{z \in \mathcal{A}(\rho)} |f(z)| \frac{|W(x)|}{\min_{z \in \mathcal{A}(\rho)} |W(z)|}. \end{aligned}$$

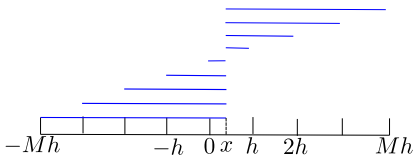
赤字の分子・分母を評価する.

(分子の評価)

$$|W(x)| = |x - (-M)h| |x - (-M+1)h| \cdots |x - (M-1)h| |x - Mh|.$$

右辺は右図の青い線分の長さの積であることを考えれば,

$$\begin{aligned} \text{右辺} &\leq h \cdot h(2h)(3h) \cdots (2Mh) \\ &= \frac{(2M)!}{M^{2M+1}}. \end{aligned}$$





# 補間誤差評価の証明

$$\therefore |W(x)| \leq \frac{(2M)!}{M^{2M+1}}.$$

一般に正の整数  $n$  の階乗については、次の **Stirling** の公式が成り立つ：

$$n! \simeq \sqrt{2\pi n} (n/e)^n.$$

$$\therefore |W(x)| \lesssim \frac{1}{M^{2M+1}} \sqrt{2^2 \pi M} \left(\frac{2M}{e}\right)^{2M} = \sqrt{\frac{4\pi}{M}} \left(\frac{2}{e}\right)^{2M}.$$

(分母の評価)

$$|W(z)| = \prod_{j=-M}^M \left| z - \frac{j}{M} \right|,$$

$$\frac{1}{M} \log |W(z)| = \frac{1}{M} \sum_{j=-M}^M \log \left| z - \frac{j}{M} \right| = \operatorname{Re} \left\{ \frac{1}{M} \sum_{j=-M}^M \log \left( z - \frac{j}{M} \right) \right\}$$

( $M$  が大きいならば)

$$\approx \operatorname{Re} \left\{ \int_{-1}^1 \log(z-x) dx \right\} = \operatorname{Re} \left\{ \log \frac{(z+1)^{z+1}}{(z-1)^{z-1}} - 2 \right\}.$$

# 補間誤差評価の証明

$z \in \mathcal{A}(\rho)$  であるから  $\mathcal{A}(\rho)$  の定義より,

$$\frac{1}{M} \log |W(z)| \approx \operatorname{Re}(2 \log 2\rho - 2) = 2 \log \left( \frac{2\rho}{e} \right), \quad |W(z)| \approx \left( \frac{2\rho}{e} \right)^{2M}.$$

結局, 次を得る.

$$|f(x) - f_N(x)| \leq \rho \text{ に依る定数} \times \max_{z \in \mathcal{A}(\rho)} |f(z)| \times \underbrace{\frac{|W(x)|}{\min_{z \in \mathcal{A}(\rho)} |W(z)|}}_{(1)},$$

$$|W(x)| \lesssim \sqrt{\frac{4\pi}{M}} \left( \frac{2}{e} \right)^{2M}, \quad \min_{z \in \mathcal{A}(\rho)} |W(z)| \approx \left( \frac{2\rho}{e} \right)^{2M},$$

$$(1) \lesssim \sqrt{\frac{4\pi}{M}} \left( \frac{2}{e} \right)^{2M} \left( \frac{e}{2\rho} \right)^{2M} = \sqrt{4\pi} \rho^{-2M} = \sqrt{4\pi} \rho \cdot \rho^{-N}.$$



# 数値例

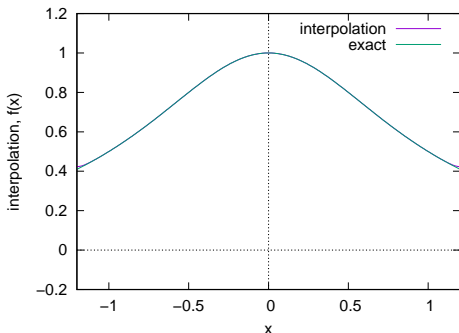
複素積分表示による理論誤差評価が正しいか，実際の数値実験で吟味する．

$$f(x) = \frac{1}{1+x^2}.$$

# 数値例

複素積分表示による理論誤差評価が正しいか，実際の数値実験で吟味する．

$$f(x) = \frac{1}{1+x^2}.$$



$f(x)$  とその 25 点等間隔標本点 Lagrange 補間多項式  $f_N(x)$  のグラフ。  
肉眼では両者の区別がつかない。

# 数値例

$$f(x) = \frac{1}{c^2 + x^2} \quad (c > 0 \text{ const.}).$$

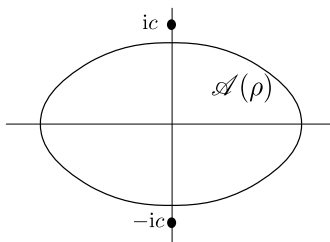
$f(z)$  は  $z = \pm ic$  に 1 位の極を持つ.

$\Rightarrow \pm ic \notin (\mathcal{A}(\rho)$  とその内部) なる  $\mathcal{A}(\rho)$  内部で  $f(z)$  は解析的で,

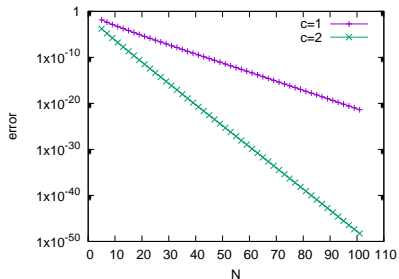
$$\text{誤差 } \epsilon_N \equiv \max_{-1 \leq x \leq 1} |f(x) - f_N(x)| = O(\rho^{-N}).$$

- (数値実験) 誤差  $\epsilon_N$  の  $N$  に対する振る舞いを調べた.
- (理論誤差評価)  
 $\pm ic \in \mathcal{A}(\rho)$  なる  $\rho$  により

$$\epsilon_N \approx O(\rho^{-N}).$$



# 数値例



数値実験より求めた誤差  $\epsilon_N$

c	誤差	
	実験	理論
1	$O(1.58^{-N})$	$O(1.55^{-N})$
2	$O(2.87^{-N})$	$O(2.83^{-N})$

- 誤差  $\epsilon_N$  は指数関数的減衰： $\epsilon_N = O(\rho^{-N})$ .
- 数値実験結果は理論誤差評価とよく符合する。

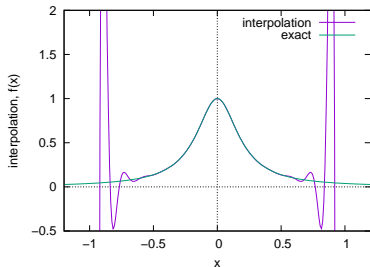
関数が解析的である範囲が広いと、補間精度は良くなる。

# 数値例

理論誤差評価の定理の仮定を満たさない  $f(x)$  に対して、  
等間隔標本点 Lagrange 補間はどうなるか？

$$f(x) = \frac{1}{1 + 25x^2}.$$

$f(z)$  の極  $\pm i/5 \in (\mathcal{A}(\rho))$  内部,  $\forall \rho > 1$ .



補間を考えている区間  $[-1, 1]$   
端点近くで補間多項式  $f_N(x)$  は  
激しく振動する.

Runge の現象

関数の極が補間区間近くにあると、補間の精度は悪くなる。

- 等間隔点標本点 Lagrange 補間.
- 理論誤差評価：補間誤差の複素積分表示を利用.
- 数値例.
  - 関数が解析的である範囲が広い（狭い）ほど、精度は良くなる（悪くなる）.
  - 数値実験結果と理論誤差評価は符合する.
  - 関数の極が補間区間に近いと、精度が悪くなる（Runge の現象）.

複素関数論による理論は役に立つ.